

地域居住の視点から 高齢期の居住環境を考える



キーワード 高齢者/ 地域居住/ 居住環境/ 地域共生社会

どのような研究をなぜ行っているか

高齢期の年齢層は幅広く、心身状況や生活環境、生活ニーズ等も様々です。日常生活のなかでは加齢によってできなくなることも増えます。そのなかで高齢者が「できること」や「やりたいこと」をサポートすることが重要で、そのための居住環境整備が必要です。

例えば、アクティブシニアに対して食品や栄養、運動の研究者等とともに健康カフェを開催しました（写真）。2年間の健康介入を行い、体組成や活動量、意識等の変化を分析するとともに、大学が地域コミュニティの拠点、フレイルを予防するまちの居場所になるかどうかを検討しました。



重度要介護高齢者の社会関係を維持することを目的とした取り組みでは、施設で暮らす高齢者に施設の外で過ごしていただく機会を継続的に設けました。そうすると、家族や友人と会う、行きつけだった喫茶店に行く、買い物、お墓参りなど、その人がこれまでに「大切にしてきたこと」が行為となって現れてきました。それとともに高齢者にとって施設が居心地の良い場所、安心できる場所へと変化していきました。高齢者は、できること、やりたいこと、大切にしてきたことを諦めて施設での暮らしに適応して下さっていたのです。この取り組みからは、重度化して地域社会との関わりが希薄になってしまうような環境は居住性を低下させると考えられました。

建物やまちづくり、社会環境、ケア等の分野の調査研究から、高齢者に諦めさせない、高齢者の誇りを守ることができる居住環境を追究しています。そして「つながりの豊かな地域居住」（西村一朗）の解を追い求めています。

研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

高齢者へのサポートは、アクティブな時から最期まで、住まいがどこであっても、シームレスに提供されることが大切です。そのためには、インフォーマルサポートのすき間をフォーマルサポートで埋めるような発想の転換と、縦横にインフォーマルサポートがある地域をつくるという視点も必要になってきます。地域づくり、すなわち住民力です。

住民力のある地域づくりの現場では、地域への愛着を強く持つリーダーの危機感と挑戦によって、チームの結束力を高めることに成功しています。現場では持っている力が活かされ楽しく活動している住民の姿を見ることが出来ます。活動の要となる地域課題は地域それぞれですが、地域居住の視点から高齢者の居住環境について考えることは、地域共生社会を指向する地域づくりにもつながります。

これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- ・ 高齢者福祉施設、健康関連企業等との共同研究
- ・ 過疎地域、重要伝統的建造物群保存地区等における教育研究連携
- ・ 市町村関係者向け研修、まちづくり研修等の講師
- ・ 講演会、シンポジウム等のパネリスト
- ・ 市町村委員会活動
- その他